

『デンマルク国の話』（内村鑑三著、岩波文庫）は1911年10月に今井館に於いて話された講演が元である。そのデンマークについて内村は1925年6月1日の日記で以下を記述している。「私はデンマルク国を少しく我が国に紹介する名誉を担うた。然るにそれよりも先に私をデンマルク人に紹介してくれた人があった。・・・幸いにして私が拙き英文を以て書いた『余は如何にして基督信徒となりし乎』並びに『代表的日本人』はデンマルク語を以て首府のコペンハーゲンに於いて出版された。・・・私は自分の生まれた日本に於いてより北欧諸邦により多くの知己を有するに至った。」。

デンマークは800-1066年のヴァイキング時代に北欧の大国であったが、歴史の紆余曲折の中で現在の小国になったことは内村の「デンマルク国の話」の背景事情として看過できない。また、デンマーク語は印欧語族ゲルマン語派の一派であり言語的にもドイツ語との類似性があることは、後の宗教改革の北欧への波及の背景条件として大切な点である。

デンマークは日本の天皇制に次いで世界で二番目に古い王政を採る。ルター派は1520年代半ばから北欧地域にも広がり、デンマークでは国王と司祭が結んで教会改革に取り組み、司教などの上位聖職者を追放して国教会としてのルーテル教会を成立させた。今日のデンマークはルター派に属する、**国王が長**、教会省が管理、デンマーク議会が最高立法機関、国税の1%が教会の財政として提供され、牧師は公務員である。

「世界の中で最も富んだる民、デンマルク人、一人の有する富は独逸人又は英国人又は米国人一人の有する富より多い」（『デンマルク国の話』）と既に内村は記すが、現代的表現では国民一人当たりのGNPは今日のデンマークも世界第8位と上位に属する。デンマークの国民の高いモラルと勤勉性は日本と共通するものがあり、内村の著書が共感を持って同国に紹介され受け容れられた背景がここにある。今日のデンマークを特徴付ける少数民族国家としての、高い生産性、女性の社会進出、北欧型福祉国家の実現等は少子高齢化が進行する今日の日本にとってのモデルという意味で、示唆するところが少なくない。但し、国主導のキリスト教、教会員を前提としたデンマークのキリスト教は無教会とは対極にある。